

親の職業威信が子の初職に及ぼす影響

斉藤知洋・鈴木野乃香・ビラール＝ニロファール
(東北大学教育学部)

1. 問題の所在と本論の目的

本論の目的は、子の両親に対する尊敬度に着目して両親の職業的地位と子の初職の満足度との関連を明らかにすることである。

親から子への職業継承性については、父―子の間では大部分の職業において職業継承性が存在することが指摘されている（小川・田中，1979）。この調査は、対象の子とその親に、職業観や親の継承期待度、子の継承希望度をアンケートへの回答で調べるものであった。

本論文では、この職業継承性は「専門的・技術的職業、そして安定職としての公務員が息子に継承されやすく、一方で工場作業員や運転手などの非専門的・低度技術的職業は、親と子の双方において継承性が低いことから、職業継承性の強さは、社会経済的地位を反映する職業水準の影響を免れない」と指摘しており、親の職業が子の職業を規定する一要因となっていることが窺える。ここでは親の職業が子の職業選択に与える影響を「父親の職業」という側面から考えているが、親の職業に加え、子どもが身体的・社会的に成長する場である「家族」という社会的集団が及ぼす影響をくみ込むべきではないのか。一般的に、思春期といわれる時期では、家族イメージが安定することで子どもは落ち着き（大下・亀口，1999）、特に家庭における父親のイメージがよいと、子どもの社会的能力が高まることがわかっている（平田，2003）。つまり、職業継承には、親の職業及び社会的地位・経済的資源だけでなく、家庭環境や子の親に対するイメージというものが鍵となる可能性が考えられる。そこで、本論では、親の職業が子の職業に与える影響を説明するものとして「両親の尊敬度」という尺度を用いて論じていきたい。

2. 仮説

2.1. 職業威信スコア・両親への尊敬度・本人初職満足度

前項で述べたとおり、親の職業が子の初職満足度にどのように影響を与えているのかをとらえるため、本稿では両親の職業と親子関係に着目し、以下の仮説を立てた。

＜仮説1＞「両親の職業威信が高ければ高いほど、そうでない家庭の子どもより、親に対する尊敬度が高くなり、子の初職の満足度も上がる。」

職業威信とは『収入・社会的地位・権力についての社会的評価にもとづいて、特定の職業従事者が共通に享受する職業の格付けの程度』（瀧嶋ほか編，1997）のことである。

太郎丸（1998）は「威信」の意味として、「広義の威信」について触れ、「第二の威信解釈は、威信を広い意味で解釈するものである。この場合「威信」は、必ずしも名誉や社会的影響力を含意しない。一般的な意味での良さ、あるいは望ましさを指す。」と述べている。

今回はその職業が社会的に尊敬されるかどうか、というようなその職業がもつイメージに着目するため、職業威信スコアを用いる。

2.2. 性別との関わり

岩永（1990）は、日本では1980年代に女性をとりまく労働条件が大きく変化したことを受け、女性の職業達成には母親の就業経験が大きな影響を与えるというアメリカの先行研究を踏まえた上で、母親が娘に与える影響に着目し分析を行った。その結果、女性の地位達成にとって母親が最も重要な鍵となると示された。

この岩永（1990）の先行研究では、両親の主職業、両親の最終学歴、本人の最終学歴、本人の初職との関連について分析が行われていた。1で述べたとおり、本稿では親の職業がこの職業に与える影響を説明するものとして、「両親への尊敬度」に着目する。そこで、岩永（1990）の先行研究から、次のような仮説をたてた。

〈仮説 2〉「女性においては、父親の職業威信よりも母親の職業威信の影響を強く受ける。母親の職業威信が高ければ高いほど、そうでない家庭の子どもより、親に対する尊敬度が高くなり、子の目標達成度も上がる。」

仮説 2 においては、仮説 1 を、対象者を男女別に分けて分析し、特に母親と娘の関係について検証する。

2.3. 両親の職業・本人の学歴・本人の職業満足度

最後に、学歴、つまり教育年数が初職満足度に影響が見られるのかについて検証する。

岡部（2007）によれば、「若者の間に広がる収入差などの格差に着目した研究は蓄積されつつあるが、一方で当事者である彼らの主観的評価に焦点を当てた研究は相対的に少数に留まっている」と述べている。岡部が述べるように従来の研究では、学歴の差異と経済的格差との関連を対象とした分析が進められており、1995 年 SSM 調査のデータを用いても本人の学歴が収入に影響を及ぼす結果が出た（表 1）。しかし、本人の学歴を規定する一要因として両親の教育戦略が挙げられ、両親の子に対する教育意識に基づいて「教育費」を投資し、結果的に子どもの最終学歴に大きな影響を与えられる。1995 年 SSM 調査のデータを用いて「父親の職業」と「本人の最終学歴」を表 1 同様にクロス集計表でまとめたところ（表 3）、「父親の職業」が「専門・管理」職であれば、「本人の学歴」は「高等」である割合が高い一方で、「半熟練・非熟練」であれば、「本人の学歴」は「初等」「中等」が大部分を占めていることがわかる。このことは、親は専門性の高い職種に就いてい

れば、子どもに自身と同等、またはそれ以上の学歴または職業を期待し、そうでない親よりも教育投資を積極的に行うため、子どもの学歴が高くなるためと考えられる。つまり、専門性の高い職種に就いている親は、例えば子どもにどこまで学歴を取得させるか、どこかの大学に行かせるかといった教育戦略を考える傾向があると言える。

このことから、本稿では、両親の職業威信が高ければ、親は子の教育戦略に対して積極的となり、子の教育年数が増える傾向にある。結果として教育年数の増加は子どもに幅広い職種を選択する機会を広げ、本人にとって望ましい職業を選ぶ傾向となり、初職満足度が高くなると仮定し、以下の仮説を立てた。

〈仮説 3〉「両親の職業威信が高くなると子の教育年数が増加し、本人の初職満足度が高くなる」

表 1¹ 本人学歴と個人収入 4 分類

		個人収入4分類					
		70万円未満	100万円くらい	200-400万円	500万円以上	合計	
本人学歴	初等	度数	188	114	180	99	581
		%	32.4%	19.6%	31.0%	17.0%	100.0%
	中等	度数	367	176	445	324	1312
		%	28.0%	13.4%	33.9%	24.7%	100.0%
	高等	度数	134	45	161	261	601
		%	22.3%	7.5%	26.8%	43.4%	100.0%
	合計	度数	689	335	786	684	2494
		%	27.6%	13.4%	31.5%	27.4%	100.0%

($X^2=132.574$ $p<0.05$)

表 2 父親の職業と本人の学歴

		本人学歴			
			初等	中等	高等
父親の職業	専門・管理	度数	20	167	254
		%	4.5%	37.9%	57.6%
	事務・販売	度数	66	266	156
		%	13.5%	54.5%	32.0%
	熟練	度数	110	249	64
		%	26.0%	58.9%	15.1%
	半熟練・非熟練	度数	367	550	113
		%	35.6%	53.4%	11.0%
	その他	度数	1	1	1
		%	33.3%	33.3%	33.3%
	合計	度数	564	1233	588
		%	23.6%	51.7%	24.7%

($X^2=473.539$ $p<0.05$)

3. データと方法

¹ 表 1 と表 2 の出典は、1995 年 SSM 調査研究会（代表：盛山和夫）、1995、『社会階層と社会移動』全国調査（SSM95・A 票）SRDQ 事務局編『SRDQ：質問紙法にもとづく社会調査データベース』（<http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp>，2011 年 9 月 20 日アクセス）である。

3.1. データ

本稿で用いるデータは、2011年7月下旬に若者の生活意識と実態を明らかにすることを目的として東北大学教育学部・山形大学地域教育文化学部が実施したアンケート調査「若者のライフサイクルと意識に関する調査」の個票である。この調査は、学校を既に卒業している20～39歳の男女を調査対象としている。サンプルは調査会社とモニター契約を結んでいる全国の既に学校を卒業している個人を無作為抽出したものである。計画サンプルサイズは500名であり、郵送調査を行い、有効回収数は447名（回収率89.4%）であった。

3.2. 変数

詳しい分析に入る前に今回の分析で用いる変数の算出方法について説明する。

① 両親の職業威信・本人の職業威信

両親の職業威信は、「調査対象者が15歳当時の両親の具体的な仕事内容」を尋ねた。その回答内容をもとにSSM職業分類および職業威信スコア（富永1994）を用いて職業スコアを算出した。

本人の職業威信は、「現在の具体的な仕事内容」を尋ね、同様に職業威信スコアを算出した。

② 両親への尊敬度

両親への尊敬度は、「調査対象者が15歳当時の両親の尊敬度」として以下の項目を尋ねた。

「父親の職業」「家庭での父親」「父親の人柄（性格や立ち居振る舞いなど）」

「母親の職業」「家庭での母親」「母親の人柄（性格や立ち居振る舞いなど）」

以上の項目について父親、母親別に「1.非常に尊敬している」「2.尊敬している」「3.あまり尊敬していない」「4.尊敬していない」の中からあてはまるものを1つ選択し、「1.非常に尊敬している～4.尊敬していない」を「4～1点」に点数化した。

③ 本人の初職満足度

本人の初職満足度は、「仕事内容」「福利厚生」「給料」「勤務地」「やりがい」「職場環境」についてそれぞれ尋ねた。以上の項目についてそれぞれ「1.満足」「2.まあ満足」「3.やや不満」「4.不満」の中からあてはまるものを1つ選択し、「1.満足～4.不満」を「4～1点」に点数化した。初職とは、「学校を出て初めて」就いた職業であり、学生時代のアルバイトは含まれない。

④ 家庭環境の満足度

家庭環境の満足度については過去の家庭環境を振り返りどのように感じるかを尋ねた。

「1.とてもよかった」「2.よかった」「3.あまりよくなかった」「4.よくなかった」の中からあてはまるものを1つ選択し、「1.とてもよかった～4.よくなかった」を「4～1点」に点数化した。

⑤ 本人の教育年数

本人の教育年数は「本人の最終学歴と学部・学科名」を尋ねて算出した。

「中学校」「高校」「専門学校」「高等専門学校」「短期大学」「大学」「大学院（修士課程）」「大学院（博士課程）」「その他」の中から1つ選択し、教育年数を「中学校」=9年、「高校」=12、「専門学校」=14、「専門学校」=14、「高等専門学校」=14、「大学」=16、「大学院（修士課程）」=18、「大学院（博士課程）」=21に数値化した。

3.3. 分析方法

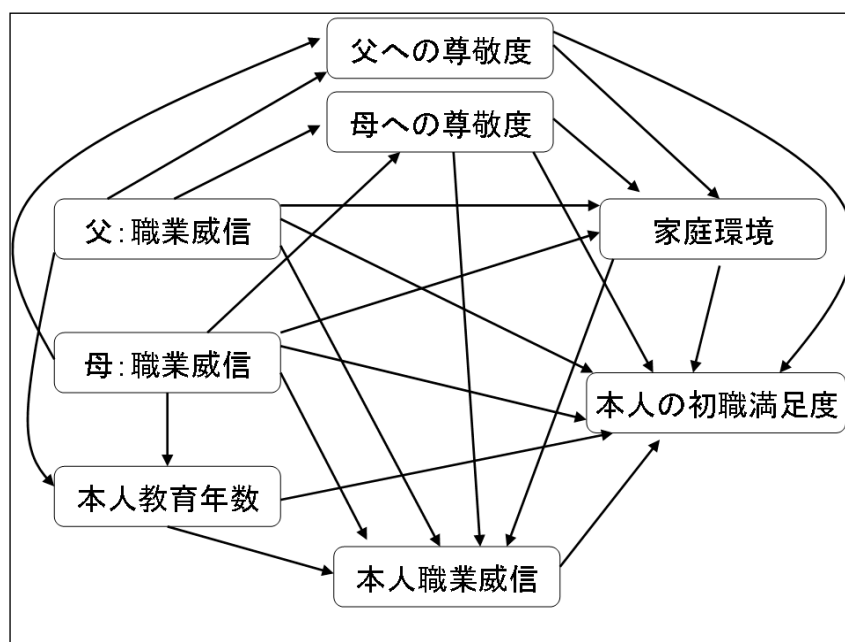


図1 仮説のモデル

上図に基づいて調査結果を分析する。仮説を検証するために主に「父：職業威信」「母：職業威信」→「父への尊敬度」「母への尊敬度」→「本人の初職満足度」の関連をパス解析により検討した。「父への尊敬度」「母への尊敬度」はそれぞれ「父親の職業」「家庭での父親」「父親の人柄（性格や立ち居振る舞いなど）」「母親の職業」「家庭での母親」「母親の人柄（性格や立ち居振る舞いなど）」の各3項目を合成変数としてそれぞれ1つの変数に置き換え（父：クロンバックの $\alpha=.801$ ，母：クロンバックの $\alpha=.803$ ），また本人の初職満足度は「仕事内容」「福利厚生」「給料」「勤務地」「やりがい」「職場環境」の6項目を合成変数として1つの変数に置き換えた（クロンバックの $\alpha=.720$ ）。同時に「本人の初職満足度」

に影響を与えると推測される「本人教育年数」「本人職業威信」「家庭環境」も独立変数として取り入れ、従属変数「本人の初職満足度」への影響度を調べた

4. 分析結果

表 3 基本統計量（両親と本人の職業威信スコア）²

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
父・職業威信スコア	396	38.1	90.1	53.771	9.2692
母・職業威信スコア	275	38.1	84.3	49.072	8.0987
本人・職業威信スコア*1	350	36.7	90.1	51.987	9.2801

表 4 基本統計量（両親への尊敬度）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
父親への尊敬度	439	3.00	12.00	7.9818	2.09471
母親への尊敬度	443	3.00	12.00	8.6930	1.93459
両親への尊敬度	436	6.00	24.00	16.6904	3.42043

表 5 基本統計量（本人の初職満足度と家庭環境の満足度）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
初職満足度（全体）	439	6.00	24.00	16.9043	3.41096
初職満足度（男性）	219	7.00	24.00	16.721	3.2693
初職満足度（女性）	220	6.00	24.00	17.086	3.5445
家庭環境の満足度	446	1.00	4.00	2.9955	.79038

² 本人・職業威信スコアは本人の現職をもとにスコアを算出したが、初職に3年以上就業している割合が66.2%であり、調査対象者が20～39歳の若年層であるから、初職と現職では職業威信スコアが大きく変化しないと仮定する。したがって、本人の現職の職業威信スコアを初職の威信スコアとみなす。

表 6 基本統計量（性別と最終学歴）

		最終学歴									合計
		中 学 校	高 校	専 門 学 校	高 等 専 門 学 校	短 期 大 学	大 学	大 学 院 (修 士)	大 学 院 (博 士)	そ の 他	
性 別	男性	3	46	20	4	4	121	22	3	1	224
	女性	4	37	30	6	48	93	4	0	1	223
合計		7	83	50	10	52	214	26	3	2	447

4.1. 仮説 1・仮説 3 の検証

<仮説 1>

仮説 1「両親の職業威信が高ければ高いほど、そうでない家庭の子どもより、親に対する尊敬度が高くなり、子の初職の満足度も上がる」を検証するために、パス解析を行い、結果を図 2 に示した。第一に、「両親の職業威信」は父、母ともに「本人の初職満足度」に直接影響を及ぼしていることはいえなかった。次に「両親の職業威信」が「両親の尊敬度」に及ぼす影響を見たとき、「両親の職業威信」は母親のみ「母の尊敬度」に対して正の影響が見られた（標準化回帰係数.135）。つまり、母親の職業威信が高くなるほど、母親の尊敬度が高まることを意味している。

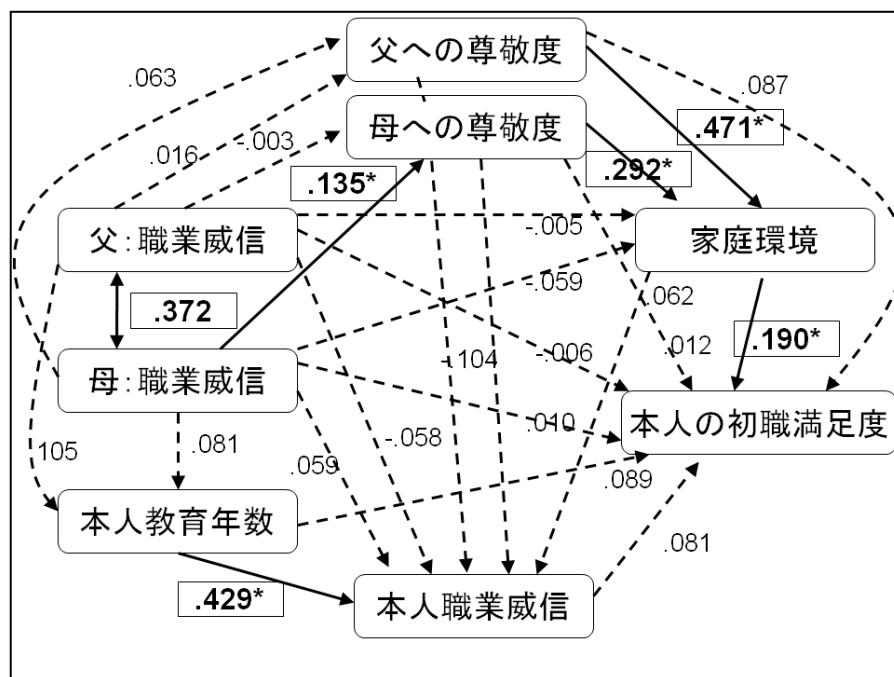
また、「父の尊敬度」「母の尊敬度」は直接、「本人の初職満足度」に影響を及ぼしているとは言えなかったが、「家庭環境」を介して「本人の初職満足度」を高めていた。今回の結果では、「父への尊敬度」（標準化回帰係数.471）が「母への尊敬度」（標準化回帰係数.292）に比べ「家庭環境」の認識により正の影響を与えていた。

以上より、父親を含めた「両親の職業威信が両親の尊敬度を高める」としていた当初の仮説は支持されなかった。しかし、「母の職業威信」は「母の尊敬度」を高め、「本人の職業満足度」に対して「家庭環境」を媒介として正の影響を与えており、母親については仮説は支持されたと言える。ここで、「母の職業威信」が「母への尊敬度」を高めるという結果が得られた要因として、①今回の分析では調査対象者が 15 歳当時に職業に就いていた母親のみを変数として用いて、専業主婦を除外したこと②女性が家事を中心的に行うべきだという性別分業意識が日本社会において依然として残っているために、子が仕事と家事を両立する母親に対して尊敬を抱く傾向がある、この 2 点が推測される。

<仮説 3>

次に仮説 3「両親の職業威信が高くなると子の教育年数が増加し、初職満足度が高くなる」を検証する。第一に、「両親の職業威信」は父、母ともに「本人の教育年数」を高めているとは言えなかった。次に、「本人教育年数」は「本人の職業威信」に強く影響を与えており（標準化回帰係数.429）、「本人教育年数」が高ければ「本人の職業威信」も高まると言える。

しかし、「本人の職業威信」が「本人の初職満足度」を高めるとは言えなかった。つまり、収入・社会的地位・権力についての社会的評価が高い職業を選択したとしても、そのことが本人の初職満足度を高くするとは言えないことになる。したがって、仮説 3 は支持されなかった。しかし、図 2 の分析は男女を合わせた調査対象者全員を分析対象としているから、職業意識におけるジェンダー差が見られる可能性がある。したがって、以下の仮説 2 と併せてさらに仮説 3 についても男女別に分析を試みる。



(*p < 0.05, +p < 0.10)

図 2 パス図 (全体)

4.2. 仮説 2・仮説 3 の検証

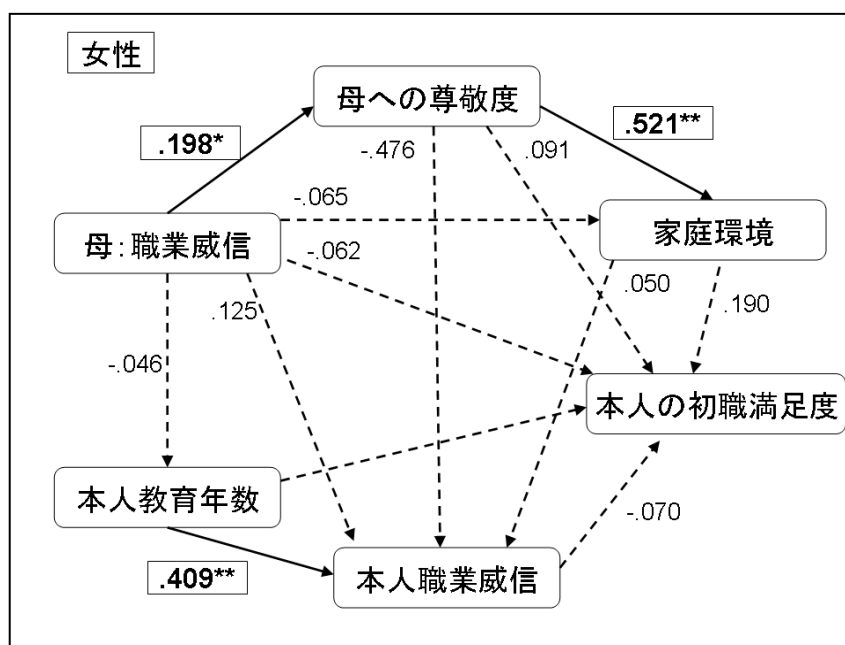
<仮説 2>

仮説 2「女性においては、父親の職業威信よりも母親の職業威信の影響を強く受ける。母親の職業威信が高ければ高いほど、そうでない家庭の子どもより、親に対する尊敬度が高くなり、子の目標達成度も上がる」を検証するために同様にパス解析を行い、その結果を図 3 に示した。まず図 3 より母親と娘の関係に着目すると、「母の職業威信」は「本人の初職満足度」に対して直接影響を与えているとは言えなかったが、「母の職業威信」と「母への尊敬度」との間に正の関係が見られた (標準化回帰係数.198)。「母への尊敬度」は「家庭環境」に対して強い正の関係が見られ (標準化回帰係数.521)、母親との良好な関係は家庭環境に対する意識をよりよいものとすると言える。しかし、「母への尊敬度」と「本人の初職満足度」との間には関連が認められず、「家庭環境」を媒介としても有意な結果は得られなかった。したがって、「母の職業威信」と「本人の初職満足度」の間には関連があるとは

言えなかった。次に図 4 を見て父親と娘の関係に着目すると、「父の職業威信」と「父への尊敬度」との間には関連が認められなかった。「父への尊敬度」と「本人の初職満足度」との間には両側 10%水準で正の関係が認められた。

この結果から言えることは次の 2 点である。①女性 は母親の職業威信が高ければ高いほど母親への尊敬度が高くなる、②女性 は父親への尊敬度が高ければ高いほど初職満足度が高くなる。

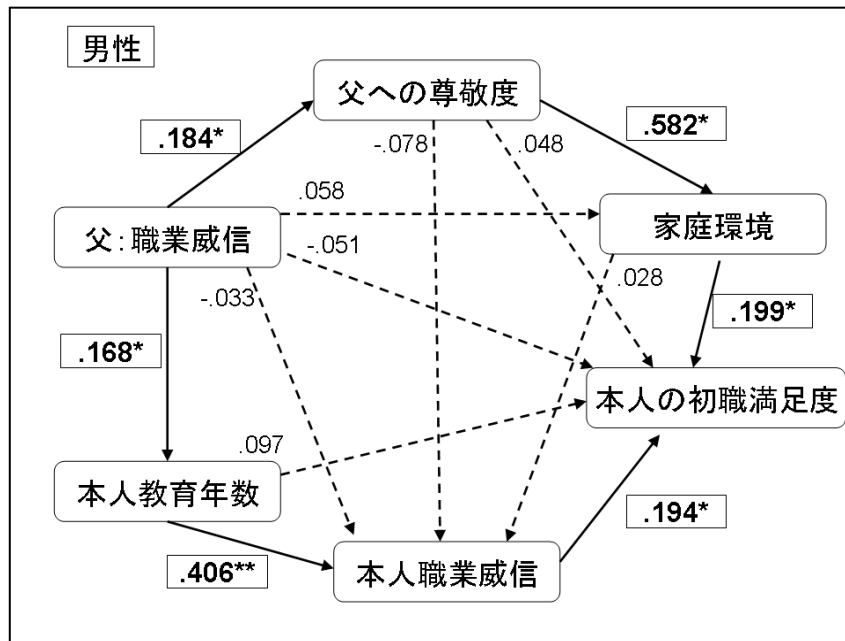
この分析からは、女性と母親、父親の関係に関しては、そもそも「親の職業威信が高ければ高いほど、そうでない家庭の子どもより、親に対する尊敬度が高くなり、子の初職満足度も高くなる」という仮説が父親、母親ともに成り立たないことが示された。



(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, + $p < 0.10$)

図 3 パス図（女性・母親の尊敬度）

一方、男性に関して同様にパス解析を行った結果、図 5・図 6 のような結果が得られた。まず父親と息子の関係に着目すると、息子の場合、「父の職業威信」は「父への尊敬度」に対して正の影響を与えており（標準化回帰係数.184）、家庭環境を介して（標準化回帰係数.582）、本人の初職満足度も高くなる（標準化回帰係数.311）といえる。

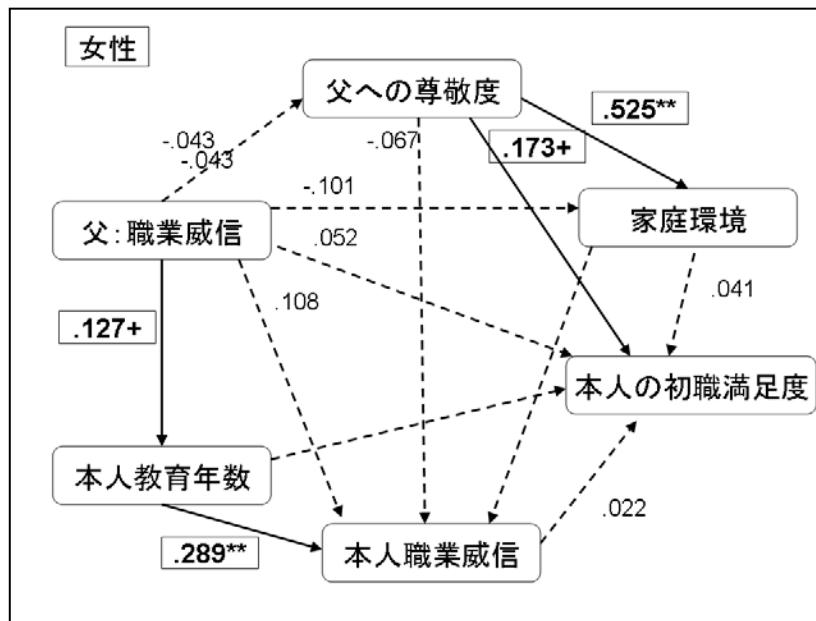


(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, + $p < 0.10$)

図4 パス図（女性・父親の尊敬度）

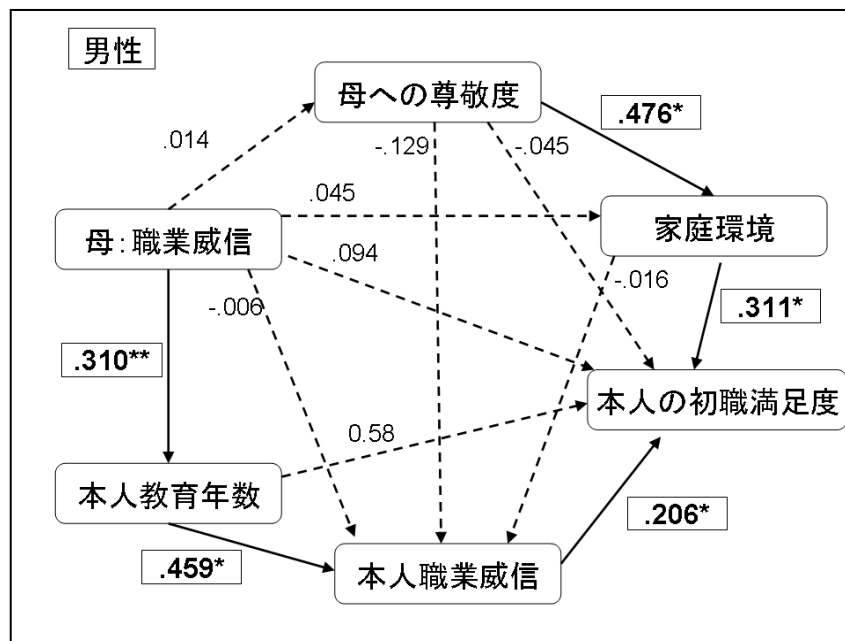
次に母親と息子の関係に着目すると、「母の職業威信」と「母への尊敬度」との間には関連が認められなかった。女性の場合には両者の間には正の関係が見られたことから、男女間では「母への尊敬度」の基準となる認知枠組みが異なっていると言える。つまり、男性の場合、「母親の職業」が「母親への尊敬」につながるとは言えず、別の母親の役割機能（例えば、家事、子への世話、しつけ、心理的接触、教育活動など）が要因となっている可能性がある。「母への尊敬度」は「家庭環境」を媒介して「本人の初職満足度」に影響を与えていたことから、男性と母親では仮説は「尊敬度」と「本人の初職満足度」の関係の一部分のみ支持された。

以上より、男性に関しては父親との関係を見たときのみ、「親の職業威信が高ければ高いほど、そうでない家庭の子どもより、親に対する尊敬度が高くなり、子の初職の目標達成度も上がる」という仮説がおおむね支持されたといえる。これは、男性は家庭の主たる経済的支援者である同性の父親をモデル化し、父親と同水準またはそれ以上の職種を志向することで、結果として初職に対して一定の満足を示すためではないかと考えられる。一方、「女性－母親」モデルでは男性と同様の結果は得られなかったことから、女性の初職満足度を高める別の要因をさらに考察することが求められる。



(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, + $p < 0.10$)

図5 パス図 (男性・父親の尊敬度)



(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, + $p < 0.10$)

図6 パス図 (男性・母親の尊敬度)

<仮説 3>

仮説 3「両親の職業威信が高くなると子の教育年数が増加し、初職満足度が高くなる」を検証するために図 5・図 6 を見ると、男性に関しては父親との関係においても母親との関係においても、「両親の職業威信」が「本人教育年数」に正の影響を与え、「本人職業威信」を媒介して「本人の初職満足度」に正の影響を及ぼしていることがわかる。つまり、男性においては仮説 3 が支持されたといえる。一方、女性に関してはどうか。図 3 を見ると、母親との関係においては「母の職業威信」と「教育年数」、「本人職業威信」と「本人の初職満足度」との間には関連が認められず、仮説は支持されなかったといえる。図 4 をみると、父親との関係においては、両側 10%水準ではあるが、「父の職業威信」が高くなると娘の「教育年数」が増加し、「娘の職業威信」が高くなるということがわかる（標準化回帰係数.127）。また、「教育年数」は男性同様、「本人の職業威信」を高めていた（標準化回帰係数.289）しかし、「教育年数」と「初職満足度」との間には関連が認められず、父親との関係においても仮説は支持されなかった。

5. 結論

本論では、3つの仮説を立てて、両親の職業威信と子の初職の満足度の関係を、尊敬度という指標を用いて説明しようとしてきた。分析結果の要旨は次の 6 点である。

- ① 「両親の職業威信」は父、母ともに「本人の初職満足度」に直接影響を及ぼしているとはいえない
- ② 「母親の職業威信」が高くなるほど、「母への尊敬度」が高まる
- ③ 「父への尊敬度」「母への尊敬度」は、「家庭環境」を介して「本人の初職満足度」を高めていた
- ④ 「本人教育年数」は「本人の職業威信」に強く影響を与えていた
- ⑤ 男性に関しては、父親との関係をみたときのみ、「親の職業威信が高ければ高いほど、そうでない家庭の子どもより、親に対する尊敬度が高くなり、子の初職の満足度も上がる」といえることがおおむね支持された。同時に「父の職業威信」は「本人の教育年数」「本人の職業威信」を介して「本人の初職満足度」に影響を与えていた
- ⑥ 女性に関しては父親、母親ともに「親の職業威信」が「本人の初職満足度」に対して直接効果及び間接効果を及ぼしているとは言えなかった

以上の 6 点より、調査対象者全員を含めた分析では、本論の目的であった子の両親に対する尊敬度に着目して両親の職業的地位と子の初職の満足度との関連は母親のみ認められた。また、男性の場合は「父親の職業威信」は「父の尊敬度」または「本人教育年数」「本人職業威信」を介して「本人の初職満足度」を高めており、仮説 1・仮説 3 は父－息子の関係において支持された。

今回の分析では、性別による制約はあったが、親の職業威信が高まると親への尊敬度が

高まり、結果として子は自分に合った初職を選択し、満足感を得る傾向があることが分かった。したがって、親の職業は子どもに対し親の職業的態度や職業的価値観を形成し、家庭生活における親と子の社会的・心理的接触を通じて子は自身に合った職業を選択すると考えられる。しかし、女性における親の職業威信と本人の初職満足度との関連については今回の分析では明らかにならなかった。現在の日本社会では従来に比べ、女性の労働市場への参入に向けて法整備が進められつつあるが、学歴または労働力を育成する場としての家庭の教育機能を女性が依然として、男性に比べて十分に享受できていないのではないだろうか。

また、女性の労働力率が、学校卒業後、就職し、結婚・出産の時期に一旦、退職し、育児が終わると再び就職するという M 字型就業パターン（女性の労働力率が 20 代後半から 30 代後半にかけて低下し、以降再び上昇するため）を辿ってきた日本社会において、女性にとって「職業」という社会的地位に対する認識が男性とは異なっている可能性がある。

現在は日本の高等教育への進学率は 50%を超える「ユニバーサル化時代」であり、同時に女性の高学歴化が進んでいる。このことは男性に限られず女性も今まで以上に家庭の「教育投資」の対象となり、女性もより幅広い職業を選択する機会が拡大されることを意味している。今後、親の職業威信が女性の初職選択に対する満足度に影響を与える可能性は十分に考えられる。また、近年は共働きや片親家庭など家族形態は多様化しつつあることから、親の職業と子の職業の在り方は大きく変化するかもしれない。

今後の課題としては、さらなる分析と先行研究の調査を行い分析の精度をあげることである。また、分析の段階で、「両親の職業威信」→「両親の尊敬度」→「子の初職の満足度」という流れではなく、「両親の尊敬度」が「両親の職業威信」→「子の初職の満足度」という関係になんらかの影響を与えるのではないかという、エラボレーションのタイプⅣが適切な仮説のかたちである可能性を見出した。今後は、これらの課題を乗り越えるような分析がなされることを切に期待したい。

参考文献

- 浜嶋朗ほか編, 1997, 『社会学小辞典[新版]』有斐閣:311.
- 平田裕美, 2003, 「青年期前期の子どもに対する父親の関わり—分類と特性—」『家族心理学研究』17(1):35—54.
- 岩永雅也, 1990, 「アスピレーションとその実現—母が娘に伝えるもの—」岡本英雄・直井道子編, 『現代日本の階層構造 4 女性と社会階層』東京大学出版会:91—116.
- 小川一夫・田中宏二, 1979, 「父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究」『教育心理学研究』27(4):272-281.

- 大下由美・亀口憲治, 1999, 「中学 2 年生の家族イメージの研究—父, 母, 子の 3 者関係イメージ—」『家族心理学研究』 13(1):1—14.
- 岡部悟志, 2007, 「仕事満足にみる若年非正規雇用の現代的諸相—非正規・男性・未婚に着目して—」『理論と方法』 22(2):169—187.
- 太郎丸博, 1998, 「職業威信と社会階層・半順序関係としての社会階層・」都築一治編, 『1995 年 SSM 調査シリーズ 5 職業評価の構造と職業威信スコア』1995 年 SSM 調査研究会:1-14.